

あなたさえ答えてくれるなら・・・  
——ソクラテスのエレンコスにおける〈第二〉の問題<sup>1)</sup>——

村上正治  
Shoji Murakami

震源——『プロタゴラス』から

T1 「しかし、そのことにどんな相異があるというのかね」と彼は言った、「もし君が望むなら、われわれにとって、正義は敬虔なものであり、かつはまた、敬虔は正しいものであるということにしておこう」

「いや、私には、そうはしておけません」とぼくは言った、「なぜなら、私が求めているのは『もし君が望むなら』とか、『もし君にそう思われるなら』といったことが吟味されることではなく、私とあなた自身が吟味されることだからです。『私とあなたが』と私が言うのは、ひとが『もし』というこの言い方を言論から排除するならば、そうすることで最もよく言論が吟味されるであろうと思うからです」*Prot.331c3-d1*.

ソフィストとして名実を備えた年長のプロタゴラスを相手に、ソクラテスは礼節をはかりながらも、自他の吟味という点で対話が無効になることを断固として譲歩しない。われわれはここにソクラテスの対話、すなわち、エレンコスの本質の表明を見るように思われる。ところが、ステファヌス版で2ページほど読み進むと雲行きはあやしくなる。

T2 「では、私は彼らに向かって言論をなすべきでしょうか」とぼくは言った、「それともあなたに向かってでしょうか？」

「もし君が望むなら」と彼は言った、「まずこの多くの者たちの言論を相手に問答をしてくれたまえ」

「しかしまあ、そのことは、私にとっては何の相異もありません。あなた

---

<sup>1)</sup>ここで〈第二〉というのは、Vlastos[SE]によって提出された「ソクラテスのエレンコスの問題」を念頭においてのことである。復習的に要約すれば、それは、ある信念体系内の整合性の吟味と、ある信念命題の真偽の論証との問題であった。

さえ答えてくれるなら、とにかくその言論があなたにとってよいと思われるのであれ、そうでないのであれ。というのも、私としては言論をとりわけ吟味するのですが、ただし、おそらくその結果、質問するこの私も答える方のあなたも吟味されることになるからです」*Prot.333c3-9*。

あれほど断固としてプロタゴラスの見解を要求したにもかかわらず、この箇所では、大衆の見解の検討を優先せよというプロタゴラスの提案をあっさりを受け入れてしまう。ソクラテスはここで、対話相手の信念の吟味というエレンコスの本質を弛緩させ、あるいは、放棄してしまっているかのように見える。一体この一見したところの矛盾は何に因るのだろうか<sup>2)</sup>。しかも、ソクラテスは、言論の検討と自他の吟味との関係において、その優先権の点で何の相異もないとし、同様の結果を期待しているようである。これは、エレンコスの構造としてどういうことであるのだろうか？

## Vlastosのエレンコス解釈によれば

### 1. 〈あなたの信じるところを語れ〉原則としてのT1

Vlastosのエレンコス解釈の特色は、倫理的真理の探究という面に重点をおき、その論証構造を浮かび上がらせようとした点にあった<sup>3)</sup>。しかし、エレンコスのもう一つの側面が忘却されているわけではない。

エレンコスは二重の目標を持つ。すなわち、①すべての人間はいかに生きるべきかを発見すること、そして、②応答をなしているところの当の単独のひとをテストすること、つまり、ひとが生きるべき仕方では彼が生きているかを見いだすことである。これは一つの作業の両面である<sup>4)</sup>。

①が倫理的真理の探究として「哲学的エレンコス」と呼ばれるのに対して、Vlastosは②のことを、善き生についての真理へと答え手もたらすために、そのひと自身の生き方を探索するという点で「臨床的エレンコス」と呼ぶ。そして、この二つの側面を一つのエレンコスに帰属させうる必須の要請条件として〈あ

<sup>2)</sup>T1とT2はその言葉使いの重複からして、プラトンは、あたかも矛盾に見えるように、読者を誘導しているかのようである。

<sup>3)</sup>Vlastos[SE]p.4「ソクラテスのエレンコスとは倫理的真理の探究であり、それを問いと答えによる反対論的議論によって行うものである、ここで議論される立言は答え手自身の信念でなければならず、その立言の論駁は、その立言の否定が彼自身の信念のうちから導出されたときに、またそのときにのみ、なされたものとされる」

<sup>4)</sup>Vlastos[SE]p.37.なお、以下の説明はVlastos[SE]p.35-38.に基づく。

あなたの信じるところを語れ〉原則が導入されるのである。

ソクラテスのエレンコスが「単に命題のみならず生き方の吟味という実存的次元」を保つためには、答え手は「自分たちの見解に自分の生の重みを負わせ」なければならない。対話相手は「言明するところのことと意図しているところのこの一致の誓約として、自分の見解を自分の生き方と結びあわせること」が要求されるのである。

もし、ソクラテスがあなたに対して、議論中の問いについてあなた個人の見解を言明するように要求するのでないとしたら、どのようにしてソクラテスは、あなたに対して、即座にであれ後にであれ、あなたの生き方についての説明を与えさせるという希望をもつことができたであろうか？

T1は、こうした重圧を負荷された〈あなたの信じるところを語れ〉原則の代表的な表明箇所とみなされるのである。では、T1と矛盾するようにみえるT2はどのように解釈されるのだろうか？

## 2. 原則の弛緩——T2をめぐる

T2についてのVlastosの解釈<sup>5)</sup>は必ずしも明確ではないが、補足して一般化すれば次の二点になる<sup>6)</sup>。ソクラテスが原則を弛緩するのは以下の場合である。

- i 非協力的な対話相手を引きとどめて（プロタゴラスの場合は面目を保つことによって）議論の続行を意図する場合
- ii 非協力的な対話相手の本心である見解を察知して、表面的には第三者の名の下に、実質は対話相手の暗黙の見解を吟味続行する場合<sup>7)</sup>

さて、T1がVlastos的な意味で重圧を担った原則であるとみなされるかぎり、もしiの理由がiiと連携せずに独立してあるならば、それは臨床的側面を担うエレンコスにとって致命的である。その場合には、Vlastosの枠組みに従えば、吟味されるのは、対話者自身から遊離したニュートラルな言論となり、彼の生き方ではなく、命題を判断する論理的能力になってしまうと考えられるからで

<sup>5)</sup>Vlastos[SE]p.37-38の説明は以下のようなものである。ソクラテスはT1において〈あなたの信じるところを語れ〉原則をすでに明確にしたのであり、また、対話相手であるプロタゴラスはこれまでの議論において不利であることが明白である。そこで、相手の面目を保つためにやむを得ない処置として、原則を弛緩させて、表向きは第三者の見解を吟味するという譲歩をなし、議論を続行させている。ただし、最終的にはその吟味の対象はあくまでもプロタゴラスである。

<sup>6)</sup>Irwin[SWYB]p.5-6.は、Vlastosの見解を「面目を保つ」Vlastos[SE]p.38と、「議論の続行」Vlastos[SIMP]p.113n29の二点としているが、私は「面目を保つ」を「議論の続行」の特殊な場合とみなす。

<sup>7)</sup>こうした解釈を、内山勝利教授1997年度研究講義での示唆に負う。

ある。従って、Vlastosからすれば<sup>ii</sup>の理由が中心に据えられるべきであり、その場合にのみ、解釈は一貫したものとなりうる。つまり、T2における原則の弛緩は表面的なものであって、対話相手自身の見解の吟味という重大な側面は堅持される。だが、<sup>ii</sup>はT2の当該箇所によく当てはまるだろうか？

### 3. 解釈 <sup>ii</sup>——エレンコスの心理主義化

T2において、大衆の見解とされる、「不正なことをする人間が、その不正を行うというその点において、思慮節制がある」という命題が、実際にはプロタゴラスも何らかの点で関与するものであるという読みは可能である。この命題について、プロタゴラスは「私としてはそれに同意することを恥であるとするだろう、もっとも ἐπει<sup>8)</sup>、人々の内の多くはそう主張しているけれども」とコメントしている。ここでの「恥」への言及は、プロタゴラスの否定にもかかわらず、むしろ、彼の内に働く、大衆の思いなしと類同化しようとする心的傾向、あるいは、それに対するある種の躊躇、抑圧の表現とみなしうるからである。

しかし、そのことから、<sup>ii</sup>の戦略が採用されていることにはならない<sup>9)</sup>。第一に、たとえ対話相手の隠蔽された真意をソクラテスが洞察しようとしても、その点を明確化することなしに暗黙理に議論を組み込んで対話を構成するという方法はすべてを不明確な藪の中におくことを意味する。<sup>ii</sup>の戦略においては、対話者間の本当の攻防は明言化されることなく、水面下で心理的に生じることになるのである。そのような吟味は対話相手との心理ゲームでしかない。

また、「どちらに向かって言論をなすべきか」と、議論の方向の選択肢について問いかけるのはソクラテスなのである。もし、ソクラテスが<sup>ii</sup>の戦略を採用しているとするならば、この場合、非協力的な対話相手に対するやむを得ぬ処置としてではなく、まるで自分からその戦略へと誘導しているかのようである。ソクラテスは<sup>ii</sup>の戦略を〈あなたの信じることを語れ〉原則の裏技とし

<sup>8)</sup>ἐπειの解釈については、Irwin[SWYB]p,8-9.

<sup>9)</sup>対話相手の恥の感情を基に議論が構成されないことについては、Irwin [SWYB] p. 12.

ここでIrwin [SWYB] の解釈について言及しておこう。Irwinの論考の目的は、Vlastosが採る見解、すなわち、プラトンはソクラテスのエレンコスについて信頼を失っていったという発展説に対する批判にある。Irwinの解釈によると、T2で〈あなたの信じることを語れ〉原則——Irwinによれば「誠実性の原則」——が弛緩されたのは、議論されるに値する異議見解を採りあげて考察するという積極的な理由による。これは、エレンコスにおける、言論の追求か、対話相手の生き方の吟味かという二者択一の枠組みからすると、前者に積極的な意味を見出すことである。しかし、Irwinはこうした解釈をとることから派生する、エレンコス全体の再解釈の必要性、また上記の枠組みの問題については言及をしていない。

て積極的に利用していることになる。

そして、大衆の見解の検討を優先せよというプロタゴラスの提案に応答するソクラテスの言葉(333c5-9)は、もし ii の戦略が採用されているとするならば、全く理解不可能であるか、あるいは、全くの皮肉ということになるであろう。なぜなら、Vlastosの解釈によれば、対話相手の倫理的信念の吟味を通じて言論自体も追求されると言えても、当面の命題が相手の倫理的信念であるかが不問に付されている場合、その言論の検討がその議論に参加するひとの生き方の吟味になるとは言えないはずだからである。にもかかわらず、この箇所ではソクラテスはそう述べている。

T1をVlastos的な意味で重圧を担った原則の表明とみなすかぎり、その原則の弛緩とうつるT2が、たとえそれが表面的であるという解釈 ii をとるとしても、整合的に説明されうるとは、私には思われないのである。

#### 4. 〈第二〉の問題の背景

困難の要因は、〈あなたの信じることを語れ〉原則への極度の加圧にある。それは、われわれに対して、ただ思われた通りに率直に判断して答えるという範囲を超えて、「自分たちの見解に自分の生の重みを負わせる」ことを要求する。そして、こうした重圧を要請する解釈の背景には二つの想定が存在する。

##### A：【倫理性と倫理的命題の論理的整合性の分離】

対話相手の倫理性と、倫理的命題の整合性を保持する論理的能力は分離してありうる。従って、当該の倫理的命題が、対話相手自身の信念の表明でない限り、論理的能力だけが試されて生き方の吟味とはならない。<sup>10)</sup>

##### B：【倫理的信念の私秘性】

倫理的信念はわれわれに私秘的に帰属しており、それを表明することも隠蔽することも可能である。従って、われわれは自分の倫理的信念を隠蔽したまま、異なる言動を遂行しうる。

もしこの二つの想定が働いているとするならば、ソクラテスのエレンコスには、それを歓迎しない非協力的な対話相手に対しては、破綻するか、心理主義に陥るかのどちらかである。なぜなら、そうした対話相手は、加圧的な〈あなたの信じることを語れ〉原則を蹂躪して、自身の倫理的信念を隠蔽し（想定B）、彼の倫理性から遊離した倫理的命題をただ論理的に整合化する（想定A）という事態が出来上がるからである。たとえ、彼がその整合性の点で論駁されたとしても、エレンコスは彼の倫理性には到達しない。従って、それに対抗する

<sup>10)</sup>Vlastos以外にあげるとすれば、たとえば、Irwin [PE]p.20.

ためには、ソクラテスは相手の隠蔽された信念を洞察するという心理主義に依存しなければならない。

しかし、この二つの想定をソクラテスは共有していないと私は考える。さしあたり、この小論での私の課題は、〈あなたの信じることを語れ〉原則を減圧することである。

## T1とT2を読み比べる

1. T1では、何について「相異がない」とプロタゴラスは発言して、何がいけないとソクラテスは非難するのか？

ソクラテスは仮定の質問者を導入しながら、「正義と敬虔は同一であるか、最も相似したものである」ということを自分の主張として選択したうえで、プロタゴラスにどう考えるかと尋ねる331a6-b8。プロタゴラスは、その選択に疑問を投げかけるにもかかわらずb8-c4、その両者が同一なのか相異があるのかについての自身の選択決定を「相異がない」こととして、「もし君が望むなら」そうしておこうと発言する。つまり、プロタゴラスは、議論の分岐点において、自身の選択決定を回避して相手に委任し、議論の進行を担うことから逃避してその外部に立とうとするのである。ソクラテスが禁止するのは、こうした議論に対する無責任な態度である。従って、議論における『もし君が望むなら』や『もし君にそう思われるなら』の排除<sup>11)</sup>でソクラテスが言おうとするのは、「対話相手に責任を譲渡せず、どちらかをあなたの判断に従って選択しろ」ということに他ならない。実際、ソクラテスの異議を受けて、プロタゴラスは渋々一応の選択決定を行うのである、「よろしい、それならいかにも、ある点では正義は敬虔と相似している」と。

確かに、選択決定は自身の見解の表明である。しかし、それは、生の重みを担った信念の表明を必ずしも意味するものではない。議論の進行に責任を担って参加することが要求されているのである。

2. T2では、ソクラテスは、何に対して「相異がない」と言っているのか？

「不正なことをする人間が、その不正を行うというその点において、思慮節制があると、あなたには思われますか」とソクラテスに尋ねられて、プロタゴラスは「私としてはそれに同意することを恥であるとするだろう」と答える。

<sup>11)</sup>ソクラテスの『もし』の排除というのは、文脈からして、限定されたものであって、言論から仮想的想定を禁止するといった一般的なものとは読めない。pace.Vlastos[SE]p.35; Taylor, p.132.

たとえば、これがプロタゴラスの本心であるかが怪しいものであるにせよ、彼はその言明において自身の選択を表明したのである。彼は少なくともT1においてソクラテスに注意された点に留意し、その規則に則っている。プロタゴラスは学習能力を備えており、プラトンは無駄に対話篇を書いてもない。

その選択決定を受けて、ソクラテスは「では、私は彼らに向かって言論をなすべきでしょうか、それともあなたに向かってでしょうか？」と自分から尋ね、プロタゴラスは大衆の見解の検討を優先してくれと提案する。ソクラテスが「相異がない」と言うのはこの場面であり、「その言論があなたにとってよいと思われるのであれ、そうでないのであれ」と述べる。つまり、検討する見解がその起源として誰に所属するものなのかを問題とはしていないということである。

ただし「あなたさえ答えてくれるなら」という限定が付される。これは T1で注意された点を意味するものであろう。すなわち、対話相手が議論の分岐点において、その都度、彼の判断に従って選択決定をなし、議論の進行に責任を担ってくれる限り、検討される見解の起源としての所属性はソクラテスのエレンコスにとって問題ではないのである。

T1とT2の両方において、〈あなたの信じるところを語れ〉原則の解釈にみられたあの加圧操作を、ソクラテスはおこなってはいない。では、他のテキストにおいてはどうかだろうか？

## 〈あなたの信じるところを語れ〉

### 1. 『クリトン』の場合Cri.49c10-e3

同意されてきた先行の議論から、不正や害悪の報復の禁止という帰結をソクラテスは提示したうえで、「クリトンよ、以上のことを同意していくうちに、思われに反して同意することのないように」と注意を促す。ここで、ソクラテスは、クリトンの倫理的信念を吟味するために彼自身の本当の見解の表明を要求しているのであろうか。確かに、ソクラテスはここでの同意の重大性を強調する。すなわち、以上の帰結を受け入れるひとは少数に留まり、かつ、そうでないひととの間には軽蔑があるだけで「共同の考慮κοινή βουλή」が成立しないと。しかし、この強調は後続する議論の分岐点としてのそれであって、この同意を基礎として議論を続行してよいかどうかというのである。つまり、議論を「共同の考慮」として成立させるために、ここの同意はその方向性において重大な分かれ目となるから、慎重に判断して選択することが要請されるわけである。さらに、とりわけ、そうした注意が与えられなければならなかったのは、

その当の見解とはソクラテス自身が一貫して保持してきたものであり、今まではクリトンも同意してきたものであるから、ソクラテスを前にしてそうした経緯がクリトンのこの時点での判断に影響を与えないようにという配慮でもある。

ソクラテスは議論の重大な分岐点において、他の要因によって左右されることなく、率直に判断選択することを要求している。

## 2. 『ゴルギアス』の場合

*Gorg.*495a5-9: 「快と善は同じものであるのか、快のうちには善くないものもあるのか」という問いに対して、カリクレスは「もし両者が異なると主張すれば、言論はぼくにとって首尾一貫しないことになるから、そうならないために、同一だと主張する」と答える。これに対して、「君は最初の言論を台無しにするのだね。いやしくも君が君自身に思われるところに反して言うのであるならば、もはやぼくと一緒に十分に事柄のあり様を究明することはできない」とソクラテスは述べる。ここで台無しにするとされている「最初の言論」とは、カリクレスが備えていると賞賛され、ひとがいかにか生きるべきかの考察において重大な要請条件といわれている「率直なもの言ひ *παρρησία* 487a3, 492d1-5」のことである<sup>12)</sup>。だが、この箇所において、カリクレスは、当該の問題への判断以外に、議論の首尾一貫性という関心要素を介在させて、自身の判断を歪曲させている。この点をソクラテスは非難しているのである。

*Gorg.*500b5-c8: カリクレスは上記の箇所で行った「快と善の同一説」を撤回するので499b-4-c6、議論は再出発を余儀なくされる。そこで、「友情の神ゼウスにかけて、君自身、ぼくのことをからかうべきでないと考えてくれたまえ、また、思われることに反して、行き当たりばったりなことを答えないでくれたまえ」と述べる。この「行き当たりばったりなこと」<sup>13)</sup>とは、当面の問題に対する判断以外に、こう答えたなら不利になるのではないかと、首尾一貫しなくなるのではないかとといった、その場その場の打算によって歪められた判断のことであり、すなわち、上記のカリクレスの態度を意味する。ソクラテスの警告は、判断形成において、他の関心要素を介入して、思われた通りの率直な判断から逸脱することは、繰り返さないでほしいということである。

## 3. 『メノン』の場合 *Men.*83d2

ソクラテスは、幾何の問題をめぐって、その知識を持たない召使いの子に「それで結構だよ、実際、君に思われる通りのことを君は答えてくれればいいのだ

<sup>12)</sup>Cf. Dodds, p.307, note on 495a7.

<sup>13)</sup>こうした解釈については、Penner, p.153-155.での『クリトン』44d6-10についての議論を参照のこと。

だからね」と述べて奨励している。

#### 4. 『国家』篇第一巻の場合 *Rep.*346a3

各技術の区別は、それぞれの機能の相異によるのかという質問に際して「さあ、思われに反して答えないでくれたまえ、そうでないと、何も決着がつかないからね」とソクラテスは述べる。これは、先行の議論におけるトラシュマコス態度を念頭においてのものである。ソクラテスによれば、トラシュマコスは、医者の場合には、その技術を厳密な意味において規定するとしながら、羊飼いの場合にはその技術の厳密性を守らず逸脱しており、一貫していないと批判されるのである<sup>345b12-c17</sup>。ソクラテスはトラシュマコスに、彼が知っている主張するかぎりは、その判断に従って一貫した説明を与えてくれることを要求しているのである。

決して網羅的ではないが、以上の事例から言えることは、〈あなたの信じることを語れ〉原則とは「当面の問題に対して、思われる通りの率直な判断を述べよ」ということに他ならない。

### 結びにかえて——倫理性と対話

「われわれはいかに生きるべきか」「どのようにしたらわれわれの魂を最善にすることができるか」という求心力をもった対話に参加しながら、自身の倫理的信念を隠蔽したうえで、論理的な整合性の能力だけを發揮して異なる言明を構築しようという想定は、どこか狂気の沙汰と言える。

むしろ、倫理に関するある命題について、問われるままにその都度思われる通りの率直な判断を述べていくことで、われわれは自分が何に関心を払い、欲求し、何を善美なこととみなしているかを、再び、あるいは、初めて、見いだすと言えるのではないか<sup>14)</sup>。さらに言えば、問われて答えようとする以前には、われわれの生は不定で不明なままに留まっており、自身の倫理的信念など所有してはいないのであって、ただ、そう思いこんでいるだけなのかもしれない。もし、ひとがそのようなものであるならば、その倫理的信念の表明に固執する必要はないであろう。あなたさえ答えてくれるなら、そのことによって、ひとは自らを表すのであり、表さざるをえないのであるから<sup>15)</sup>。

<sup>14)</sup>Cf.内山p.15-16.

<sup>15)</sup>従って、もはや答えぬ人達、ソクラテスに対して口を閉ざす人達が現れる。カリクレス (*Gorg.*501以下)、プロタゴラス (*Prot.*360d-e.)、アニュトス (*Men.*94e-95a)、トラシュマコス (*Rep.*350d以下)。

## 参照文献

Dodds, E.R., *Plato Gorgias*, 1959.

Irwin, T., *Plato's Moral Theory*, 1977. [PMT]

———, "Say What You Believe", *Apeiron* 26 (1993), p.1-16. [SWYB]

———, *Plato's Ethics*, 1995. [PE]

中畑正志, 「『ソクラテスのエレンコス』への覚え書き」九州大学哲学会編『哲学論文集』30 (1994), 1-21.

———, 「対話と真理 — 『ソクラテスのエレンコス』への覚え書き」  
『古代哲学研究 METHODOS』29 (1997), 1-22.

Penner, T., "Two Notes on the *Crito*; The Impotence of the Many, and 'Persuade or Obey'", *Classical Quarterly* 47 (1997), p.153-166.

Taylor, C.C.W., *Plato Protagoras* (revised edition), 1991.

内山勝利, 「対話と想起——プラトン哲学の「方法」——〔その一〕」  
『哲学研究』562 (1996), 1-21.

Vlastos, G., "The Socratic Elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1 (1983), 27-58. [SE]

———, *Socrates: Ironist and Moral Philosopher*, 1991. [SIMP]

———, *Socratic Studies*, 1994. [SS]